

出門みずよ

寺脇 研

渡邊寧久

※三人の書き手が交替でお送りします

昨今の落語界は、ホール落語や独演会を中心に回っている。評判や情報もそちら中心ならば、切符入手困難状況もその方面で起きている現象だ。したがって、そこに多く登場する落語家に脚光が当たる。寄席出演できない流派の人や寄席にほとんど出られない二ツ目クラスに目が向けられるのは、悪いことではない。いやむしろ、多様な落語家の存在に可能性を開くという点では良い傾向とも言えるだろう。

ただ一方で、寄席が軽視されらるとなると、必ずしも喜んではいけない。ホール落語や独演

会の盛況をよそに、寄席の入りはやや淋しい気がする。一時、「落語ブーム」に乗って繁盛したときに比べ、特に夜の部で空席が目立つ。その意味で、夜間割引を拡大し2800円の料金を18時以降2200円、19時以降1400円に設定した新宿末広亭の試みは注目されていい。いよいよ寄席興行側の改革が始まった。

だって、寄席の出演者のレベルは決して低くないのだから。そこへお客を呼び込むための工夫を、寄席側も出演者側ももっと考えてほしい。ホール・独演会重視だと、逆に、

そちらにはあまり出ないが寄席にしよっちゅう登場する実力派が見落とされる。たとえば小袁治。この人が出てくると場が締まる。『三年目』

『笠碁』『柳田格之進』などトリを取ったときの格調高さもいいが、普通の出番のときの軽いネタが豊富な上、常に水準以上なのである。オーソドックスに演じてみさちんと笑わせてくれるが、お使いの人を東北弁にした『金明竹』、中高年に向けて御三家といえは橋、舟木…とやる『紀州』、そして『堪忍袋』では田中直紀前防衛相らしき人に「俺は辞めない！」と叫ばせる時事

ネタも挟まれるなど、この融通無碍ぶりがいかにも寄席らしい。またたとえば笑遊。若い頃は演じる意欲が勝ちすぎている感があったこの人も年齢を重ねみごとに味が出てきた。漫談風のおしゃべりが、実に楽しい。嘶でも嫉妬がテーマの『格気の独楽』に愛嬌があったり、珍妙な『祇園祭』を披露してくれたりする。自分自身が落語を愉しんでいる風情が、客席まで和ませる。そう、寄席の客席は和やかでなければ。寄席に合った落語家は、まだまだたくさんいる。ぜひ、寄席に足を運んで彼らを発見していただけないだろうか。

てらわきけん★初プロデューサーを務める映画『戦争と一人の女』の撮影で松竹京都撮影所に滞在。江口のりこ、永瀬正敏、村上淳の役者陣の演技力に舌を巻く毎日です。